グローバル2011敦賀セッション 報告

～世界的なエネルギー展望～

原子力機構は、日本原子力学会（主催）との共催で12月16日、敦賀市のプラザ萬象で187名のご参加を得て「グローバル2011敦賀セッション」を開催しました。

東電の事故受け米仏韓の3氏が講演

セッションでは、米国・フランス・韓国の専門家から東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、世界的なエネルギー安定供給と地球温暖化対策の両立のために、各国が展望しているエネルギーベストミックスの姿を講演いただきました。

引き続き、高速増殖炉研究開発センター（もんじゅ）の近藤所長から、エネルギー資源確保としての「もんじゅ」の意義と役割及び国際協力を通じた「もんじゅ」の利活用について説明を行った後、講演者と地元のパネリストによるパネルディスカッションを行いました。

■米国のエネルギー展望

安全性など向上した次世代原子力システムに投資

米国アイダホ国立研究所（INL）D・ヒル副所長

米国の電力需要が2035年までに31％増加すると予想されており、福島事故以降も、再生可能エネルギーの重要性を求めながらも、原子力の重要性は変わりません。

今後も確実なエネルギー源として原子力開発を継続し、安全性・経済性・廃棄物低減性等の向上を進めた第4世代原子力システムに投資していきます。

■フランスの原子力 現状と展望

福島の教訓を生かして開発を進めることが重要

フランス原子力・代替エネルギー庁（CEA）J．ブシャール長官付顧問

電力の大部分を原子力に依存しているフランスにおいては、福島事故の後、直ちに全ての原子力発電所のストレステスト等の対策が実施されています。欧州ではドイツ、イタリアが脱原発を表明しましたが、フィンランド、英国、東欧州諸国では新規建設が継続されています。

フランスにおいても、原子力に対する厳しい世論がありますが、多くの国民は電気料金の上昇、雇用の減少、気候変動への影響を敏感に捉えています。

フランスにおいては、従来に比べて安全性を向上した第3世代炉の建設が進められており、さらに安全性を高めるためにも第4世代炉の導入が不可欠です。そのためには「もんじゅ」の運転経験が重要であり、今後も日仏等の国際協力を継続し、福島の教訓を生かして開発を進めていくことが重要です。

■韓国における福島原子力発電所の事故後におけるエネルギー展望

日本の高速増殖炉の開発継続は世界的な貢献に

韓国原子力研究所（KAERI）D・ハーン副理事長

韓国においては、石油・天然ガス等化石燃料資源が少なく、狭い国土を考えると再生可能エネルギーの可能性が限定的であることから、原子力がクリーンかつ経済的で持続可能な基幹電力です。

福島の事故を受け、規制当局による特別安全性検査が実施され、安全性向上を図るとともに国民・報道機関への危機情報の共有等に迅速に対応しました。原子力の役割が重要であることは認められていますが、使用済燃料の取扱や原子炉の運転期間延長に対する懸念が示されています。ただし、大勢としては、競争力のある代替エネルギーが開発されるまで原子力利用が必須と考えられています。

また、放射性廃棄物の低減や資源の有効利用のため、ナトリウム冷却高速炉の開発を進めようとしています。この分野の世界的リーダーである日本が開発を継続することは、世界的な貢献につながります。

市民も参加しパネルディスカッション

真実を語り 誠実に対応し 異なる意見に耳を傾けることが 住民の理解を得る上で重要

橋詰武宏氏（ジャーナリスト）の司会のもと、講演者に加えてパネリストとして地元の藤森和明氏（敦賀商工会議所青年部会長）と前田待子氏（敦賀市連合婦人会理事）が参加し、両氏からのご質問を中心にパネルディスカッションが展開されました。

福島での事故以降、原子力に対する国民意識が変化しているなかで「原子力と共存するために必要なことは何か」というテーマでは、講演者から「真実を語り誠実に対応し異なる意見に耳を傾けることが住民の理解を得る上で重要である」との意見が出されました。

また、パネリストからは「日本の原子力技術は世界でもトップレベルだと思っている。3・11以降も日本はその技術を途上国に輸出するという話題も耳にするが、きちんと事故の教訓を生かしてさらに世界の先頭を走ってもらいたいし、地球温暖化対策にも貢献していただきたい」「原子力利用に関して、専門家が未来を見据えた冷静な議論を行った上で、その結果を提示してもらいたい」という意見や「再生可能エネルギーの利用については、直ちに基幹電力にはならないと思うので当面は原子力が必要だと感じているが、発電所の運転・管理に従事する方も地域の住民に安心安全を与えられるように意識してほしい」との意見が出されました。

運転・管理に従事する方も 地域の住民に安心安全を 与えられるように意識して

前田氏

藤森氏

そのほか、高レベル放射性廃棄物処分に関するテーマでは、講演者から「高速炉サイクルを用いて、その発生量や放射性有害度を低減することが重要である」との提言がなされました。

最後に橋詰氏から、「福井県は原子力誘致から約半世紀が経過し、また、大きな事故を踏まえて冷静に将来を考える時期とも言える状況において、海外の事情を理解することによって広い視野に立つことができた」との総括がなされました。

橋詰氏

近藤所長

（左から）ヒル氏、ブシャール氏、ハーン氏

「グローバル」とは

「グローバル（Ｇｌｏｂａｌ）」は、核燃料サイクルに関する国際会議で、１９９３年にシアトルで第１回会議が開催されました。その後は定期的に開催されており、第10回会議となる「グローバル２０１１」は、15か国以上の参加を得て平成23年12月11～15日に幕張メッセ（千葉市）で、16日にはその「敦賀セッション」がプラザ萬象で開催されました。

次回は、２０１３年にソルトレイクシティ（米国ユタ州）において開催される予定です。